



ロンドンの博物館を巡って (1) : ケンジントン地区

著者	池田 勝彦
雑誌名	汗陵 : 関西大学博物館彙報
巻	70
ページ	2-5
発行年	2015-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/00023840

ロンドンの博物館を巡って(1) ～ケンジントン地区～

池田勝彦

ロンドンの博物館の雄はもちろん「大英博物館」(British museum)である。大英帝国時代の「戦利品」で埋めつくされた様は壮観である。ただ、「戦利品」は多くの「インディー・ジョーンズ」によってもたされた事実を認識する必要があるかもしれない。

British museumについては既に安武真隆先生によって詳細なご報告(汗陵 No.69)があるので、そちらをお読みいただければと思う。

1995年に在外研究でロンドンを訪れてから2015年で20年になるが、その間すくなくとも年に1度はロンドンに足を運んでいる。決して「ロンドン通」などと豪語できるほどの情報も無いが、20年間に亘ってロンドンの定点観察をしてきたことは確かである。そこでロンドンについて書かせていただいても、叱られないのではと思ひ、ロンドンの博物館を取り上げさせていただくことにした。

最初にお断りしておかなければならないことがある。ロンドンについては少しだが情報を持っているが、UK内でロンドン以外の街は全く知らないと言ってよい。スコットランド、ウェールズ、北アイルランドは訪問したことが無い。イングランドでも、ロンドン以外では主要な都市や観光地のみで、昨年夏に国際会議の関連でリバプールを初めて訪問したような状況である。元工業都市であるマンチェスターにはいまだに行く機会がない。つまり、ロンドン偏重型の知識しかないといわれても仕方がない。この点はまずお許しいただければと思っている。

今回は、私の在外研究先であったインペリアル・カレッジ(IC)のあるケンジントン周辺の博物館について紹介したい。

ケンジントン周辺の主な博物館は、ビクトリア・アルバート博物館(Victoria-Albert Museum, V&A)、科学博物館(Science Museum)、自然史博物館(Natural History Museum)になると思う。もちろん探せばまだまだあるかと思うが、情報が無いのでお許しい

ただきたい。

ロンドンの中で「大英博物館」につぐ博物館は「V&A」だと思う。ビクトリア女王とその旦那様のアルバート公の名前を冠した由緒正しい博物館である。科学・芸術をこよなく愛したアルバート公が大英帝国の産業の発展を願い、王室の狩場であった場所で開催した1851年のロンドン万国博覧会の後、1852年に産業博物館として開館したのがV&Aの前身である。

この博物館の売りは「芸術とデザイン」とされている。陶磁器、家具、衣装類、ガラス細工、宝石、金属細工、写真、彫刻、織物、絵画などがぎゅうぎゅう詰めに陳列されている。まさに「陳列」という表現が正しく、何らかの意図を反映させて「展示」されているという感じではない。この陳列感が「大英博物館」と大きく異なる点である。

大英博物館は「学芸員」がしっかりと収蔵品を調査し、それに基づいて整然と展示されている。それも「見る側」を強く意識した展示になっていると思う。博物館であるから当然であるといえば当然であるが、「V&A」は違う。品物が多いからそれを見えるように如何に並べるかが重要であるように思える。この品物が「なぜここに」という印象を受けることがある。V&Aの学芸員の「深い」洞察のもとに置かれているかもしれないが、私のような「ずぶの



写真(図)1 ビクトリア・アルバート博物館の正面玄関付近



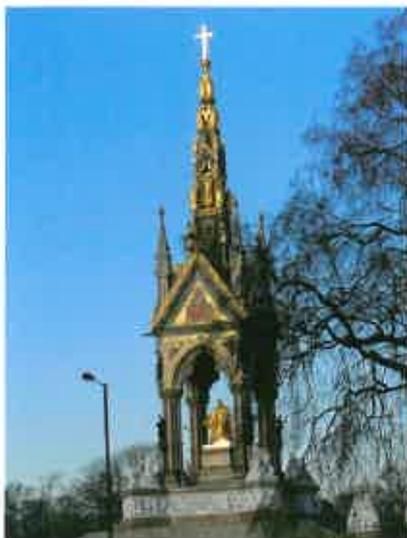
写真(図) 2 ロイヤルアルバートホールの正面玄関付近

素人」にはそれを押し測ることができない。

写真1はV & Aの外観である。如何にもという建物であり、ビクトリア女王の威光が感じられる。

アルバート公の名前が冠されている建物では、ロイヤル・アルバートホールがある(写真2)。円形の建物で、夏恒例のThe Proms(クラシック音楽コンサート)が行われる会場としても有名である。エアコン設備が長らく設置されず、夏は暑い会場として有名であった。現在はエアコンの設置もあり、夏が暑いということも回避されていると思う。さらに、アルバート公の冠する建造物としては、ケンジントン・ガーデンに立つアルバート・メモリアル(写真3)がある。金色に輝くアルバート公の像が鎮座している。観光案内になってきたので話を戻すことにする。

「芸術とデザイン」を展示することを宣言し



写真(図) 3 アルバートメモリアルの正面



写真(図) 4 ファッション関連の展示

ている博物館であり、「ファッション」が重要なアイテムの一つである。ファッションを時代ごとに展示している。写真4に示したような展示となっている。ファッションの進歩を常設で展示している博物館も珍しいであろう。

アルバート公が科学・技術を好んだことを反映して、「Materials & Technology」の展示も充実している。「材料と技術」を展示するためにアイテムに、宝飾品・銀製品・陶磁器などを挙げている。確かに材料と技術である。この範



写真(図) 5 銀食器関連の展示(1)



写真(図) 6 銀食器関連の展示(2)

疇で括ると、彫像も絵画もすべて「材料と技術」である。写真5・6がそれにあたる。この展示が私には「陳列」に見えてしまう。「芸術とデザイン」と「材料と技術」を融合させて博物館として唯一のものかもしれない。この点ではとてもユニークな博物館かもしれない。入場は無料だが、マップは1ポンドの寄付、博物館維持の4ポンド以上の寄付をお願いしたボックスが玄関にそれとなく設置されている。なぜかボックスは透明である。

次も「材料と技術」の総本山的な博物館である科学博物館（Science Museum）に話を移す。この科学博物館にはイギリスが「産業革命」の国であることを示す多くの展示がある。たとえば、ロバート・スチーブンスンのロケット号が展示されている。これは蒸気機関車第1号である。科学技術の進歩に影のように付きまとう「兵器」についても展示されている。写真7はV2号の模型である。ロンドンを恐怖に陥れた代物



写真(図)7 V2号ミサイル



写真(図)8 原爆投下後の広島からもたらされた資料



写真(図)9 原爆関連資料の説明文(一部)

である。これには「最初の実験」と書かれてあった。確かに「最初の実験」に違いない。この説明は非常に重い意味が封じ込まれているように思える。

写真8は原爆投下後の広島からもたらされた資料である。写真9がそれらに関する説明(一部)である。その説明文に「・・・which helped end the Second World War.」と書かれている。この一文が欧米人の考え方の根底にあるかもしれないということは意識すべきであり、これを変更しないということも強く意識すべきであると思う。しかし、この記載が永遠であるとは思えないし、思いたくない。

ところで、私はバイオマテリアルの研究者の端くれでもあるので、バイオマテリアル関係の展示について少し触れることにしたい。その例を写真10に示す。この展示物は人工関節等がブ



写真(図)10 バイオマテリアル使用部位を示すための展示



写真(図)11 自然史博物館概観

ラスチック人体に埋め込まれている。バイオマテリアルで製造された生体用の部材・器具がどのような位置にどのように使用されているかがとてもわかりやすく展示されている。われわれも心掛けた「見せ方」の好例であると感じた。

科学博物館は、科学・技術のすばらしさと恐ろしさを見せつける博物館である。さらに、科学・技術はニュートラルで、それを扱う「人間」によって素晴らしくも恐ろしくもなることも（潜在的であるかもしれないが）見せつけている博物館でもある。

最後に自然史博物館（Natural History Museum）である（写真11）。正直まだ入ったことのない博物館なので期待していたが、恐竜の展示と入場無料が影響してか、とんでもない人人で（写真12）、ウインブルドンで約5時間並んだ猛者の著者でも勇気ある撤退をした。この博物館については次の機会に書かせていただければと思う。

今年もロンドンで年末・年始（2014年12月28日～2015年1月3日）を過ごした。例年になく



写真(図)12 自然史博物館への入場を待つ人人…

晴天の日が続いた。これほど晴天が続いたのは1995年以降でも経験しなかったことである。ただ、晴天であると放射冷却のために冷え込むことが多いという難点もある。また、ロンドンの冬名物であるゲール（強風）にも遭遇することなく過ごせた。これも非常にまれなことだと思っている。

1995年以降、20年間にわたりロンドンという「博物館都市」を見てきたが、このロンドンでさえも近代化（良い意味でも悪い意味でも）してきており、定点観測者として非常に興味深く感じている。

「ロンドン観光案内その1」とした方がよいような内容で「博物館誌」の原稿として相応しいかどうか非常に疑問である。著者の能力不足であることとお許しいただければと思っている。

もし次に機会を頂戴できるのであれば「ロンドンの博物館を巡って(2)～自然史博物館～」または「ロンドンの博物館を巡って(2)～コベントガーデン周辺～」を書かせていただければと思っている。